

水洗遺跡

第4次調査

久留米市文化財調査報告書 第240集



2006

久留米市教育委員会

序

久留米市には、筑後川や耳納山地がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けて暮らしてきた先人達が積み重ね、創造してきた生活・文化遺産が数多く存在しています。

本書で報告する水洗遺跡周辺では、昭和52年度から開始された東部土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査を契機として、縄文時代・弥生時代、奈良～平安時代の遺跡が多数発見されています。その一角にあたる水洗遺跡も、縄文時代、及び奈良～平安時代の遺跡であることが周知されている遺跡です。

その発掘調査の成果を記録した本書が、埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、生涯学習や学術研究の資料として活用されますことを願うと共に、今回の調査に対し、御理解・御協力いただきました地域住民の皆様を始め、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成18年11月30日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、久留米市東合川町所在の水洗遺跡第4次調査の報告書である。
2. 調査は、共同住宅の建設に伴い、地権者■■■■氏と久留米市長江藤守國との契約に基づき、受託事業として実施したもので、発掘調査から報告書作成に至る費用は、■■■■氏が負担した。
3. 発掘調査は、久留米市文化観光部文化財保護課の水原道範が担当した。現地調査は平成18年3月14日より同年4月24日まで実施し、整理作業は平成18年5月1日から同年5月31日まで実施した。
4. 本書に掲載した遺構の実測図は水原の他、柁島ミドリ・山田治代が作成し、遺物実測図の作製と図面の浄書は水原と非常勤職員の畠中和子・原田志保、写真撮影は水原が行った。
5. 本書の遺構実測図は日本測地系第Ⅱ座標系（旧座標系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書中の遺構略記号は、SD……溝、SK……土坑、SF……道路、SX……その他の遺構、SP……ピットを示す。
7. 本調査の略記号はMZ A - 4、調査番号は200537である。
8. 本文中に記した6桁の数字は、本市文化財保護課における遺物登録番号で、調査番号を省略して表記している。
9. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本書の執筆・編集は水原が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	6
IV. まとめ	17

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査は平成17年6月14日、地権者である■■■■氏から久留米市東合川町字水洗370-1、370-2、370-3の3筆における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出されたことに始まる。対象地では昭和60年に水洗遺跡第1次調査が実施され、縄文時代前期の生活遺構が良好な状態で検出されている。今回対象となる場所は第1次調査区の北側隣接部分にあたることから、同年6月24日に試掘を行ったところ、遺構は発見されなかったものの包含層が残されていることが確認されたため、以後は協議を行い、発掘調査を実施することで協議が成立した。その後、12月28日に発掘調査の依頼が提出されたことを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませ、平成18年3月8日に■■■■氏と久留米市長江藤守國は「水洗遺跡第4次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わし、3月14日より現地における発掘調査を開始した。

2. 調査の体制

本調査に係る組織体制は以下のとおりである。

調査委託：■■■■

調査主体：久留米市教育委員会

	教育長	石川 集充
調査総括：久留米市文化観光部		
	部 長	緒方 眞一
	次 長	辻 文孝
文化財保護課	課 長	関 知彦
	課長補佐兼課主査	立石 雅文 山口 淳
	事務主査	松村 一良
		大石 昇（平成18年3月まで）
		近澤 康治
	調査庶務	権藤 節子（平成18年4月まで）
		本庄 ともえ（平成18年5月から）
	調査担当	水原 道範
	整理担当	畠中 和子・原田 志保

発掘調査臨時職員

大坪進・岡富士子・柁島ミドリ・國武三歳・堤淳子・西田美恵子・堀江俊文・森山美千代・柳鈴子・
山田治代・良永美佐子・良永洋子・吉村智子

出土遺物整理臨時職員

緒方梨奈

3. 調査の目的と経過

今回の調査は、隣接するへボノ木遺跡を中心に広がる奈良～平安時代遺構の分布状況の把握、及び第1次調査において良好な状態で検出された縄文時代前期の包含層の広がり把握することを主目的とした。

調査は平成17年3月14日、重機による表土除去作業から開始した。試掘調査の成果から地表面から60cmの深さで遺構検出面に達すると考えていたが、調査区東端～中央部では遺構検出面まで110cmの深さがあったことから、増量した排土の置き場を確保するため調査面積を予定よりも狭くせざるを得なかった。翌日からは作業員を動員し、調査機材の搬入と上面遺構検出作業を行った。17日には遺構検出作業を終了し、平板を用いて遺構検出状況図を作成。その後は遺構の掘り下げと実測作業を同時に進行して調査を進めた。27日には上面遺構の全景写真を撮影。29日には上面遺構の実測を終了。翌30日からは縄文グリッドの掘り下げを開始したが、この日をもって平成17年度分の作業を終了した。4月6日に平成18年度分の契約を交わし、12日より作業を再開した。縄文グリッドの掘り下げは20日に終了し、調査機材を撤収。21日と24日に重機による遺構の埋め戻しを行い、現地作業を終了した。

遺構実測は、個別遺構図を1/20で作成。上層遺構配置図や縄文遺物出土状況図は遺跡調査汎用シテム「カタタ」を用いて作成し、そのデータは「カタタ3DC」に記録し保存している。写真記録は6×7サイズのモノクローム、及びカラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。

整理作業は平成18年5月1日～同月31日の期間に実施した。

II. 位置と環境

調査地は久留米市街地東部の東合川町字水洗に所在する。付近は高良山から筑後川へ向かって低位段丘が発達しているが、調査地もその一つで、西側を井田川、東側を中谷川と2本の小河川によって開析された谷に挟まれて舌状に延びる台地上、標高12m付近に立地する。水洗地区はこの仮称和泉台地の中央西縁部に位置し、西側対岸の筑後国府が展開する枝光台地との間には、約2mの標高差で幅50～60mの谷が存在し、その谷を形成した井田川は調査地のすぐ南西側で北流から西流へと流路を変更している。

この台地上では、前期の本遺跡の他に、東方に隣接するへボノ木遺跡で早～晩期、北西約300mの西小路遺跡には後・晩期の縄文時代遺跡が存在するが、西小路遺跡では御領式段階の竪穴住居を検出し、その中からは、西日本ではきわめて稀な石冠をはじめ石棒や線刻土器などが出土したことが特筆される。さらに周辺を見ると西方300mに早・前期の上遺跡群、同600mには晩期の広野遺跡、また東方400mには、西平～三万田式段階の竪穴住居が検出された後・晩期の神道遺跡が分布する。

この低位台地上には弥生時代の遺跡も多数存在し、へボノ木遺跡・朝妻遺跡には集落が存在し、破鏡を持った住居も発見されている。西小路遺跡では甕棺墓が発見されている。

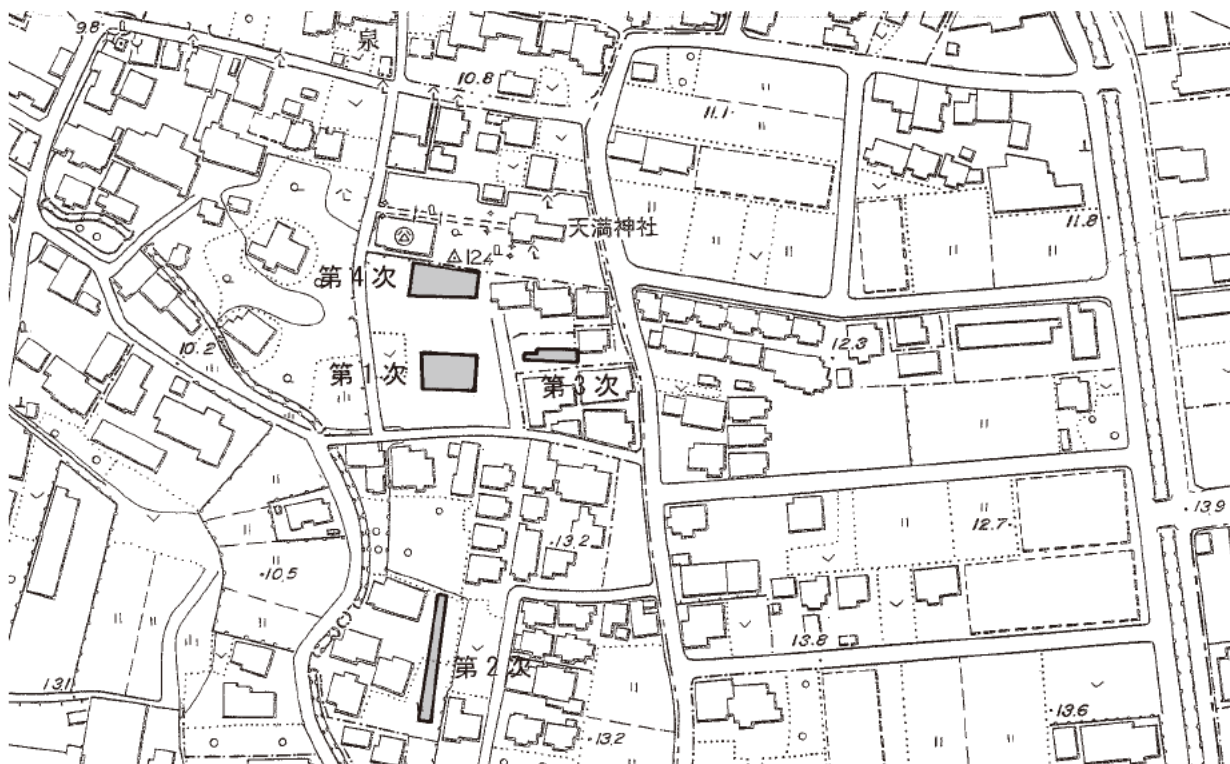
この台地上で画期となるのは奈良時代の後半～平安時代初めの時期で、へボノ木遺跡には回廊で囲繞された建物を中心としてその北側・南側に建物群が営まれ、その性格は官衙、もしくは寺院と推定されている。水洗遺跡にもそれに関連した集落と考えられる遺構群が存在する。

中世には西小路遺跡に有力者の館と考えられる遺構が検出されるが、近世には城下町の近郊農村である和泉村の一部となり、昭和50年代までは農村の雰囲気色が濃く残されていた。それが九州縦貫道の久留米インターが設置されたことや、それに伴う区画整理を経て市街地化が進み、さらに近年は付近に郊外型大規模ショッピングセンターが進出したことで、景観が著しく変貌している地区となっている。



1. 水洗遺跡第4次調査
2. I期国庁（古宮）
3. II期国庁（阿弥陀）
4. III期国庁（朝妻）
5. IV期国庁（横道）
6. 神道遺跡
7. ヘボノ木遺跡
8. 西小路遺跡
9. 上遺跡
10. 広野遺跡
11. 御堂島遺跡
12. 下見遺跡
13. 新府遺跡
14. 安国寺甕棺墓群
15. 野口遺跡
16. 二本木遺跡

第1図 調査地点及び遺跡分布図（1/25,000）



第2図 水洗遺跡調査地点位置図（1/2,000）

水洗遺跡は下記文献に報告されているが、文献①③では第1次調査の概要のみを報告。また第2次調査は未報告である。

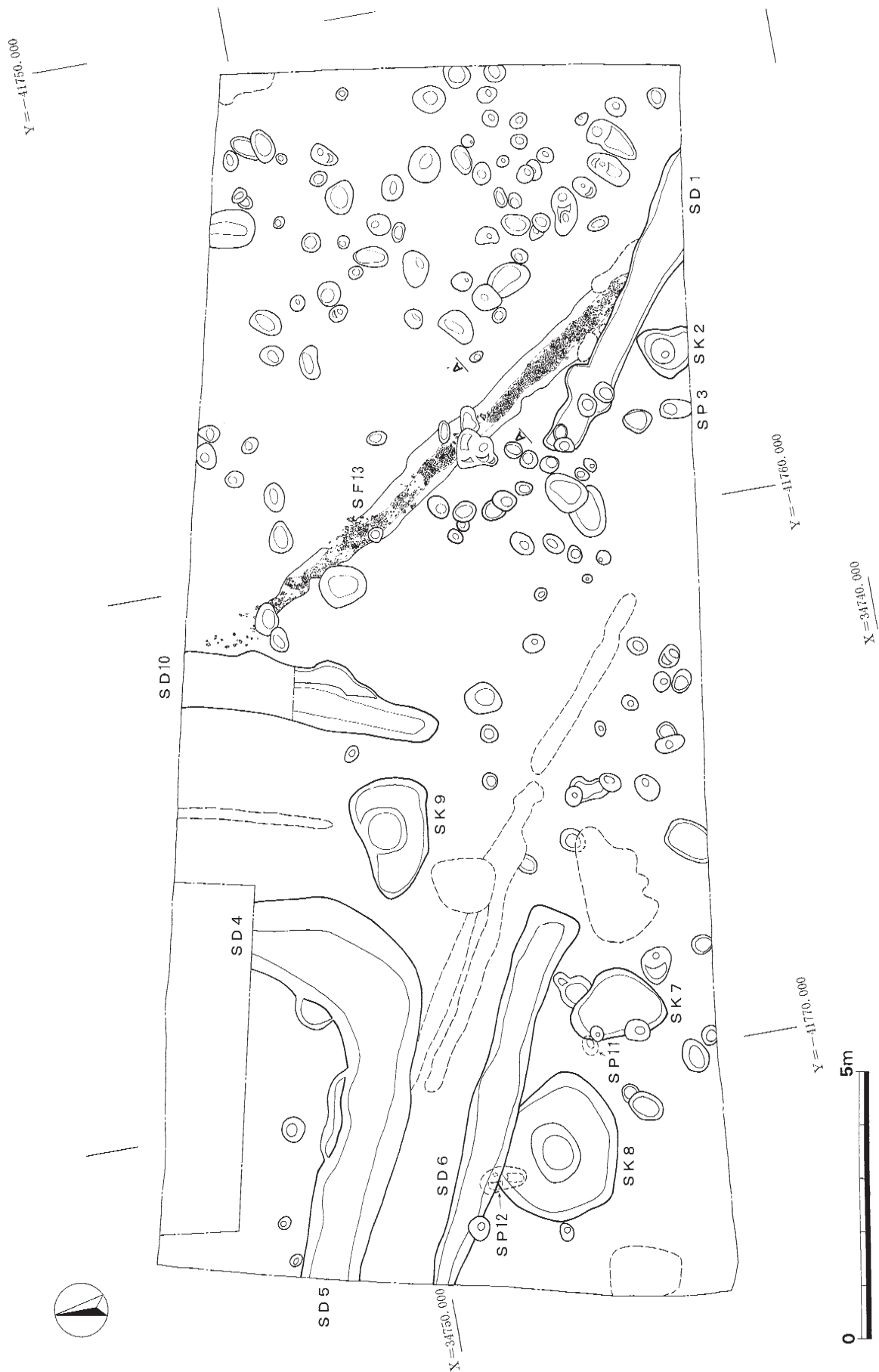
- ①「水洗遺跡の調査」『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』第5集 久留米市文化財調査報告書第45集 1986
- ②「水洗遺跡（第3次）」『平成6年度久留米市内遺跡群』 久留米市文化財調査報告書第97集 1995
- ③「水洗遺跡」『久留米市史』第12巻 資料編考古 久留米市 1994



第3図 水洗遺跡第4次調査全景（西から）



第4図 水洗遺跡第4次調査全景（東から）



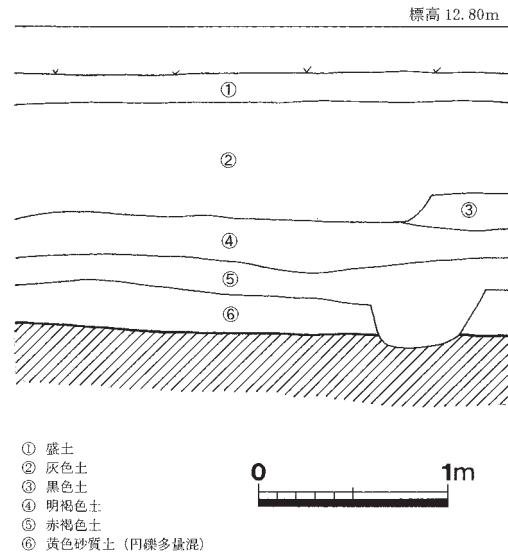
第5図 水洗遺跡第4次調査上層遺構配置図 (1/100)

Ⅲ．調査の記録

1. 基本層序

今回の調査は対象地2,185㎡の中で、共同住宅の建物が建設される218㎡について行なっている。調査区西部の基本層序は、第①層（盛土）、灰色土の第②層、黒色土の第③層（歴史時代の遺物包含層）を経て、地表から約60cmで第④層明褐色土に達し、その上面が歴史時代の遺構検出面である。この遺構検出面のレベルは南西側から北東側へ向かって傾斜し、調査区東端部では地表面から地山面までの深さは110cmを測る。また、第④層は調査区西部にのみ存在し、この層だけに縄文時代の遺物が包含されている。

調査区北西部を一部試験的に深く掘り下げたところ、約25cmの厚さがある明褐色土下には第⑤層の赤褐色土、第⑥層の直径2～10cmの円礫が多量含まれた黄色砂質土層を経て、黄色砂質土層が存在している。



第6図 調査区北西壁面土層図（1／40）

2. 歴史時代の遺構

溝

SD1 調査区南東部で検出。東側は調査区外へ延びているが、約6m分を検出。幅60cm。底面のレベルは南東側から北西側へ向かって傾斜しており、深さは10～20cm。埋土は褐色土ブロックを多く含んだ灰色土。土師器や黒色土器など63点の遺物が出土した。

SD4・5（第7図） 調査区北西部で検出。南北溝SD4とそれからほぼ直角に西側へ折れた東西溝SD5からなる一連の溝である。共に上端幅100～120cm。断面は逆台形を呈し、下端部幅70～80cm。深さは20cm前後で、底面は円礫層に達し、水が溜まっていた状況は見られない。埋土は灰色土中に明褐色土ブロックを多く含む土である。土師質土鍋3点、石鍋1点、土師器99点、龍泉窯系青磁1点などが出土。



第7図 SD4・5（西から）

SD6 SD5の南側を東西走行する溝。西側は調査区外へ延びているが、7.1m分を検出した。幅は東側が広がり40～80cm。底面のレベルは東側の方が深くなり、深さは10～25cmを測る。埋土は灰色土による一括埋土。SK8よりも後出する。

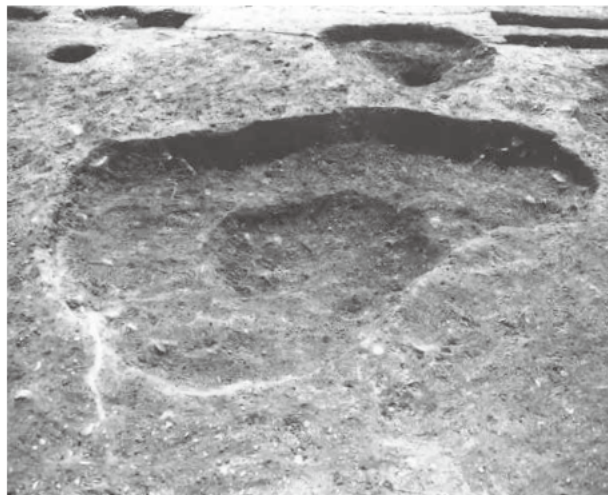
SD10 調査区中央部で検出した南北溝。北側は調査区外へ延びているが4.6m分を検出。上端幅約70cm、断面はU字状を呈し、深さは約30cm。埋土は灰色土。19点の土師器が出土している。

土坑

SK2 調査区南東部で検出。南側は調査区外へ延びており、南北長70cm分を検出。東西約80cm、深さ



第8図 SK8全景（北西から）



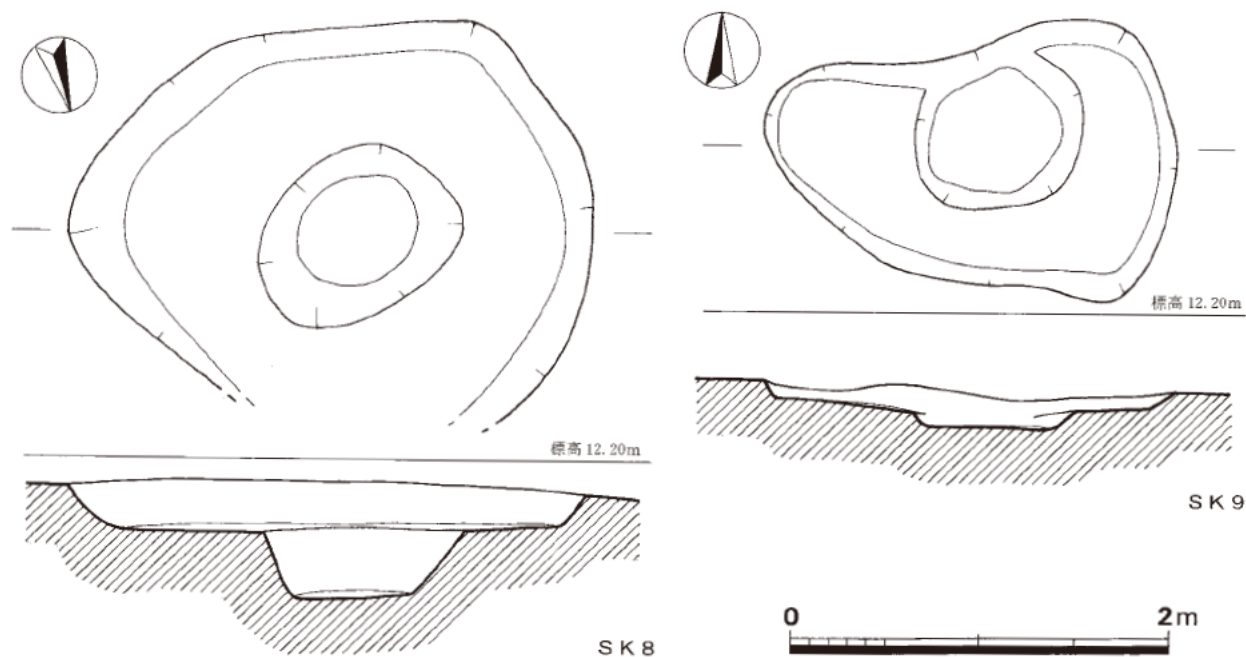
第9図 SK9全景（北から）

は55cmを測る。埋土は灰色土中に明褐色土ブロックが少量含まれた一括埋土である。遺物は土師器細片19点と須恵器細片1点が出土したのみである。

SK7 調査区南東部で検出。平面形が長軸約175cm、短軸約120cmの楕円形を呈する土坑。深さは約15cm。底面は平坦で、埋土は明褐色土ブロックを少量含む黒色土。遺物は近世磁器1点や土師器16点など28点の細片資料が出土している。

SK8（第8・10図） SK7の西側で検出。SD6よりも先出する土坑。平面形は楕円形を呈し、長軸2.6m以上、短軸2.2m、深さは約25cmを測る。底面の中央には長軸約1.0m、短軸約80cm、底面からさらに約30cm掘り下げられたピットがあり、その底面は礫層に達していた。埋土は明褐色土ブロックを多量に含む黒色土。土師器201点、須恵器9点、黒色土器A類15点、縄文土器36点、石器55点が出土。

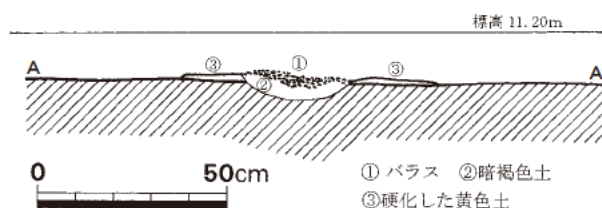
SK9（第9・10図） 調査区中央部で検出。平面形は楕円形で長軸約2.1m、短軸90～130cm、深さ10～15cmを測る。埋土は灰色土。遺物は土師器24点、龍泉窯系青磁細片1点など45点の遺物が出土。



第10図 SK8・9実測図（1/40）



第11図 SF13（北西から）



第12図 SF13断面図（1/40）

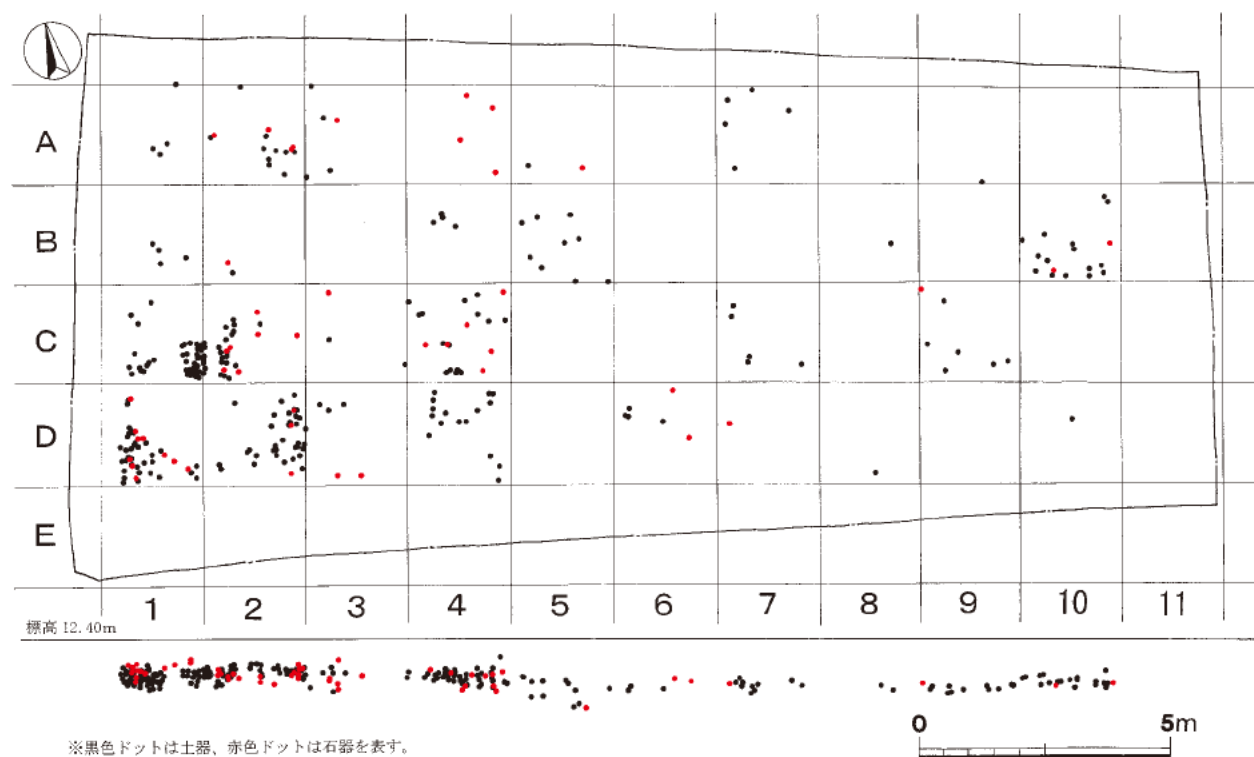
道路遺構

SF13（第11・12図） 調査区中央部で南東―北西方向へ走行する道路を約11m分検出。北側はSD10付近で削平により失われ、南側も後出するSD1やピットによって失われているが、北側・南側共に調査区外へ延びているものと考えられる。この道路

は地山を約5cm掘り込み、一度暗褐色土を敷いた上に直径1～2cm程のバラスや直径5cm程の円礫を固く敷き詰めて造成された路面が幅30～40cmの範囲で検出された。また、その両側約15cmの範囲には地山の黄色土上に黄色土を貼り付け、この黄色土は著しく硬化している。さらに、残存路面を中心とした幅2mの範囲にはピットが検出されず、この範囲が本来の道路幅と考えられる。方位はN-34°-W。遺物は土師器6点、須恵器1点、縄文土器2点の細片資料が出土したのみである。

ピット

SP3 SK2の西側で検出。平面形が南北40cm、東西35cmの楕円形を呈するピットで、深さは25cm。埋土は暗褐色土である。



第13図 縄文時代遺物出土状況図（1/150）

3. 縄文時代の調査

上面の調査を終了後、グリッドを設定し掘り下げた。近現代の攪乱や歴史時代遺構が深くまで掘り込まれることや、縄文時代の包含層が調査区西部にしか残存していないことから、縄文時代遺物の出土は最も厚く包含層が存在した調査区南西部に多く見られ、全体で808点の前期遺物が出土した。

ピット

SP11・12 共に直径約30cm、深さ40cm前後の円形を呈するピット。SP11からのみ縄文土器32点、黒曜石製石鏃1点、同剥片2点が出土。



第14図 縄文遺物出土状況（西から）

4. 出土遺物

今回の調査では、パンコンテナー2箱分の遺物が出土した。その大半は縄文土器と土師器で、その他には須恵器と黒色土器A・B類、龍泉窯系青磁、瓦器、土師質土鍋、滑石製石鍋、肥前系磁器が少量出土しているが、細片資料が多く、実測するに至った資料は少ない。

縄文時代の遺物は、555点の土器と253点の石器が出土した。そのうち109点の土器は後世の遺構の中に流入したものである。石器は黒曜石製石鏃が5点、サヌカイト製の石匙2点、凝灰岩製磨石1点の製品を除けば、237点の黒曜石、及び7点のサヌカイトのそれぞれ小剥片が出土したに過ぎない。

縄文土器は、有文と無文のものがあるが、無文土器が大半を占め、有文土器は154点が出土したに過ぎない。有文土器については、文様の種類や施文方法の違いにより、『久留米市史』第12巻所収の報告では第1次調査出土品について以下に示す9種に分類が試みられており、今回もその分類に準じて遺物を分類した。その中から細片資料であるため、分類を判別し難い99点を除いた有文土器を図示している。

第Ⅰ類・・・貼り付け隆帯文のみで構成される深鉢。

第Ⅱ類・・・隆帯文と他の施文法を組み合わせたもの。

第ⅡA類・・・隆帯文に連続する刺突文や押引文が組みあわされたもの。

第ⅡB類・・・平行する隆帯文と沈線文からなる一群である。

第ⅡC類・・・隆帯文と弧状沈線文とを組み合わせたもの

第ⅡD類・・・隆帯文と短沈線による綾杉文・魚骨文を組み合わせたもの

第ⅡE類・・・隆帯文とⅡA～ⅡDの組み合わせ文の2種以上を融合したもの

第Ⅲ類・・・連続刺突文または連続押引文のみで文様構成されるもの

第Ⅳ類・・・横走する平行沈線文のみからなる一群。

第Ⅴ類・・・横走する平行沈線文と弧状沈線文を組み合わせたもの。

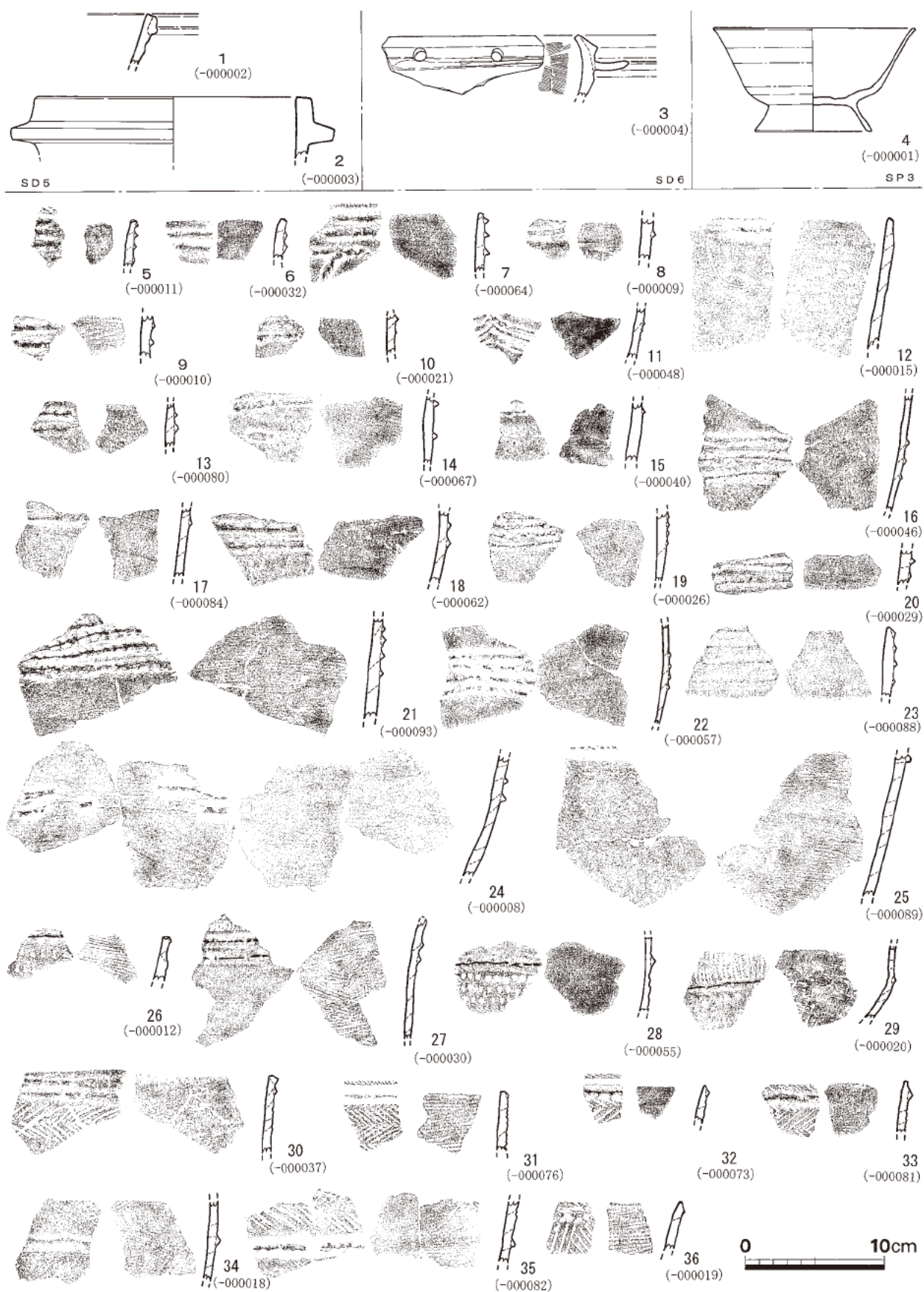
第Ⅵ類・・・短沈線による綾杉文・魚骨文をモチーフとしたもの。

第Ⅶ類・・・短沈線の綾杉文と横走する平行押引文を併用したもの

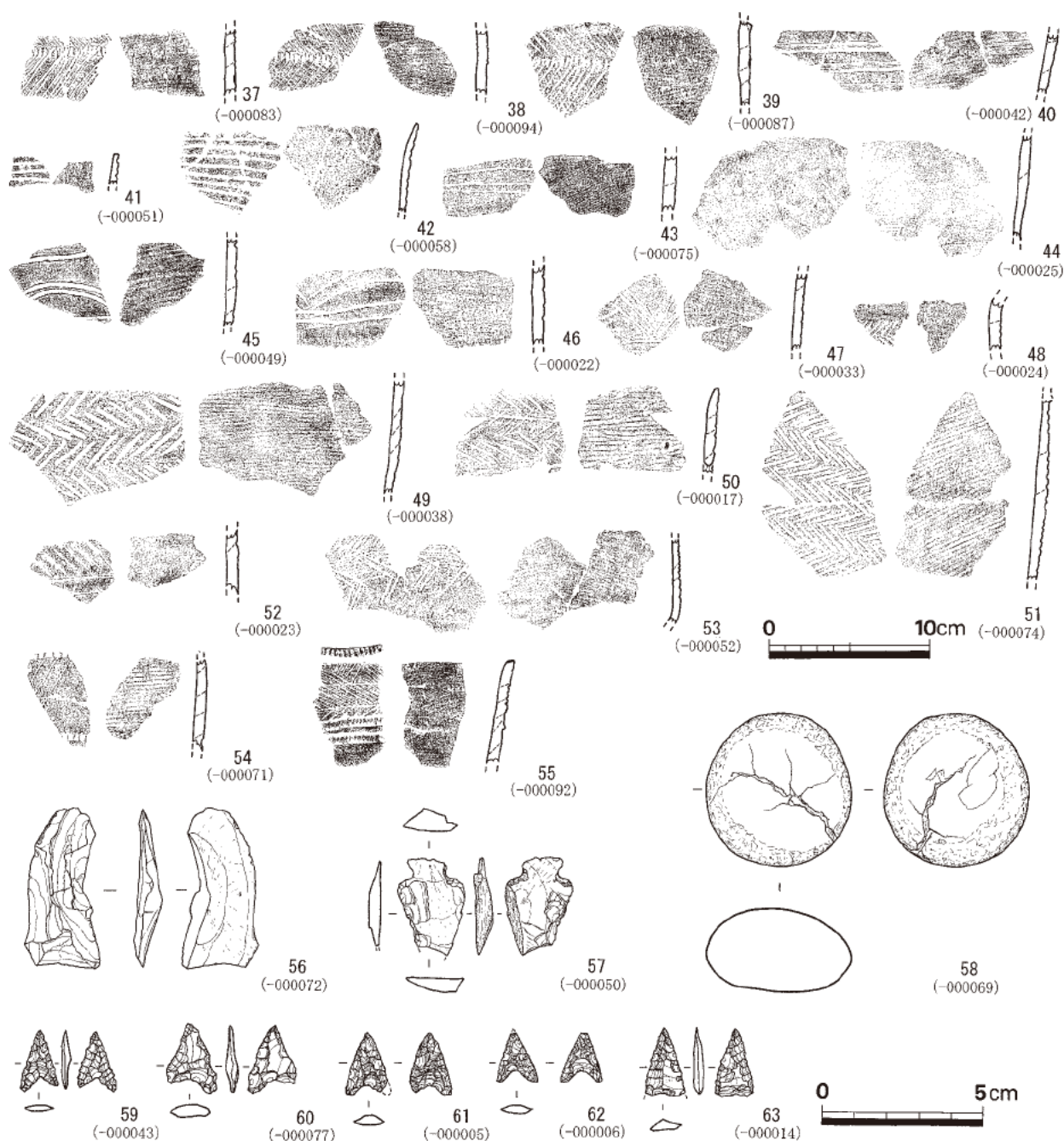
第Ⅷ類・・・刺突状の幾何学的な短沈線からなる文様を持ち、口縁が波状を呈するもの。

第Ⅸ類・・・短沈線による幾何学文が施文され、胎土中に滑石粉末を含むもの。

この分類で表される特徴から、第Ⅰ類土器は前期前半の轟B式土器の範疇に属し、第Ⅷ・Ⅸ類土器が



第15図 水洗遺跡第4次調査出土遺物実測図① (1/4)



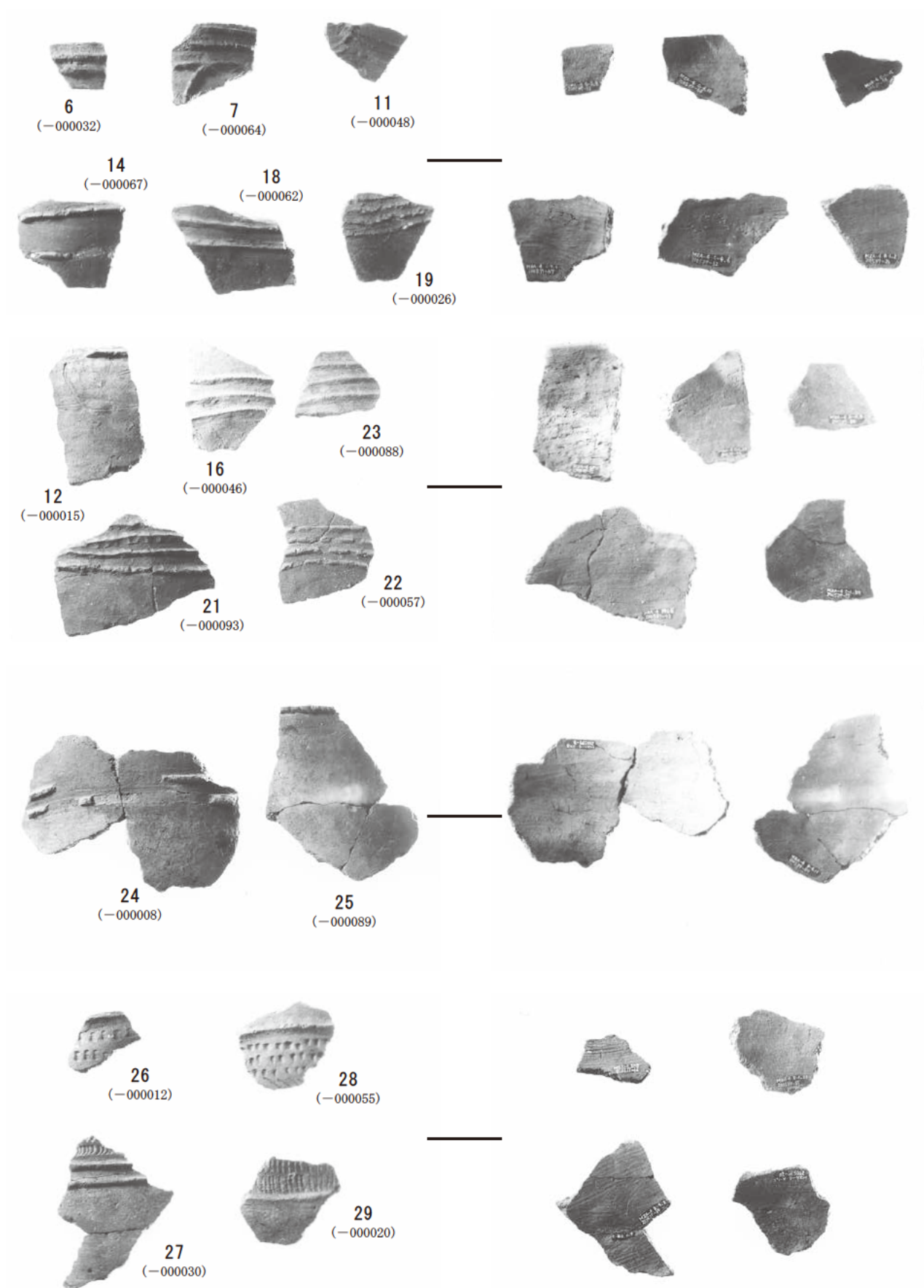
第16図 水洗遺跡第4次調査出土遺物実測図② (37~58は1/4・59~63は1/2)

曾畑式の最古段階に属すると考えられている。第Ⅱ～Ⅶ類土器は、「プロト曾畑」「西唐津式」「深堀・野口式」などと呼称され、轟B式と曾畑式の間位置する土器群で、量的にはこの段階の土器が最も多い。

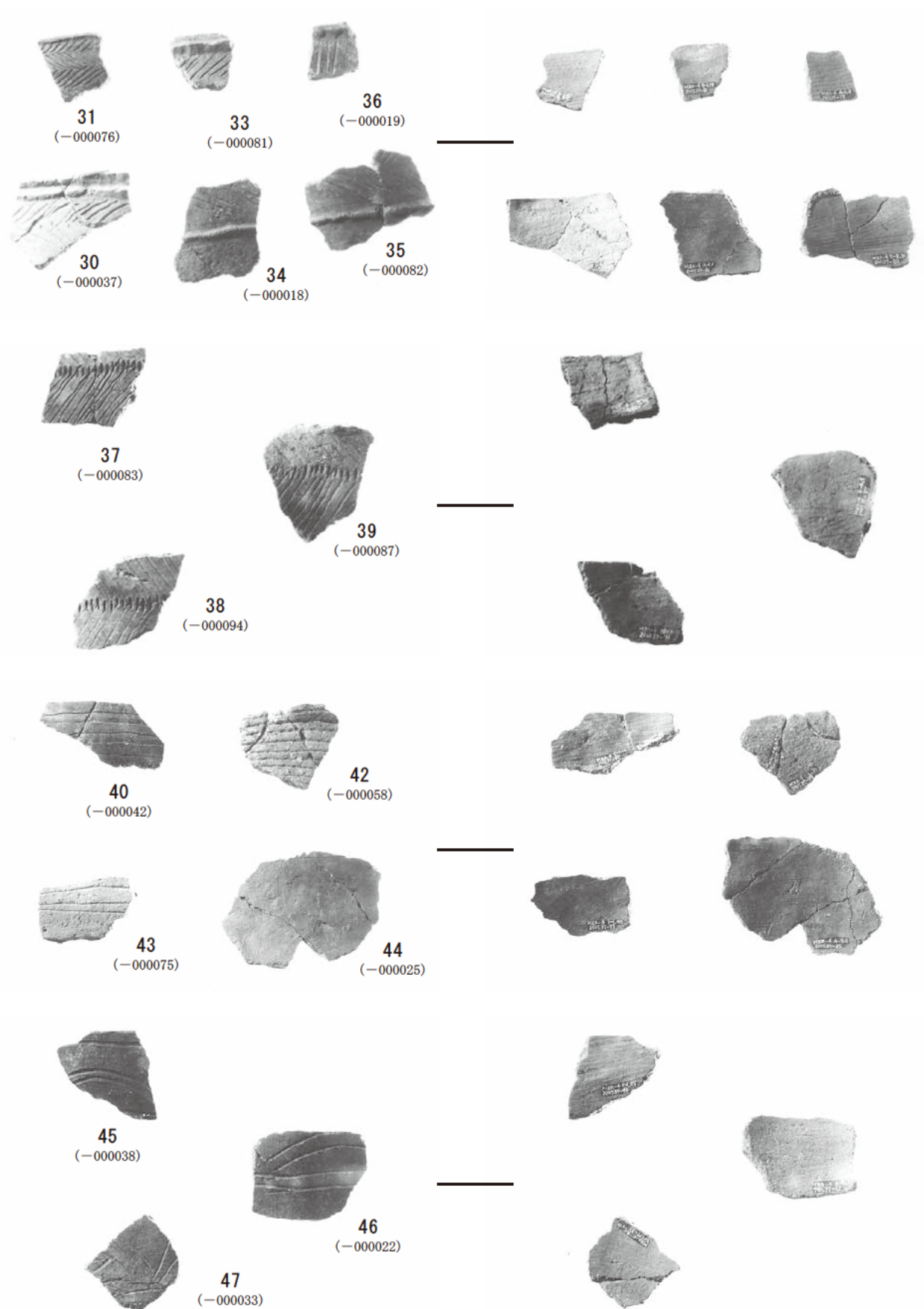
なお、今回の調査では第ⅡB・Ⅷ・Ⅸ類は出土していない。

無文土器は、401点が出土しているが、有文土器の下半部が無文であるものも多いことから、実際には有文土器の割合がもっと多いと考えられる。

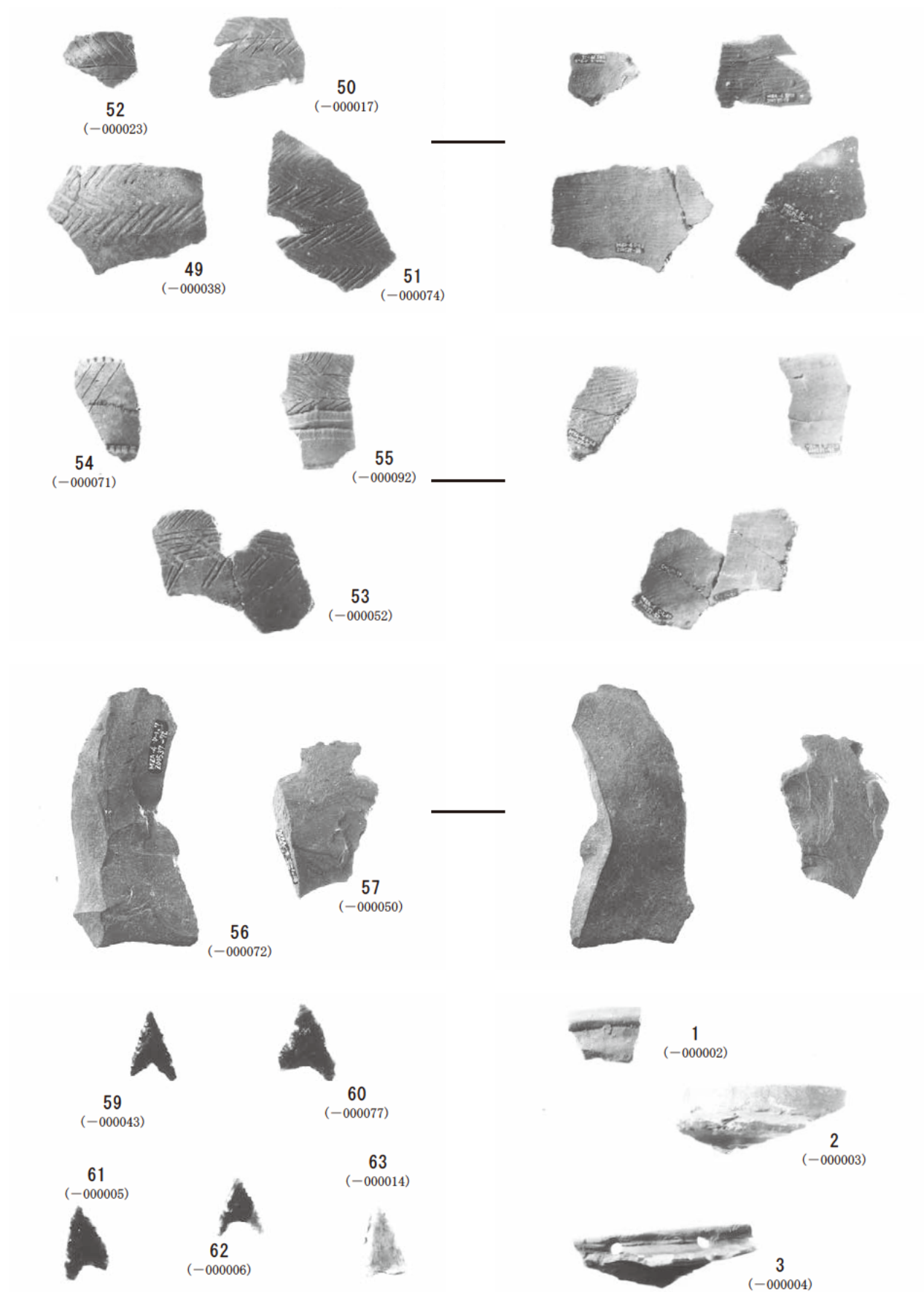
縄文土器の器種は、丸みのある平底の深鉢が大半を占め、その他には胴部が緩やかに屈曲する鉢形土器やボール状の鉢・椀形土器と考えられる土器片が少量見られる。なお、接合関係にある資料は少なく、それらはすべて近辺で出土している。



第17図 水洗遺跡第4次調査出土遺物写真①



第18図 水洗遺跡第4次調査出土遺物写真②



第19図 水洗遺跡第4次調査出土遺物写真③

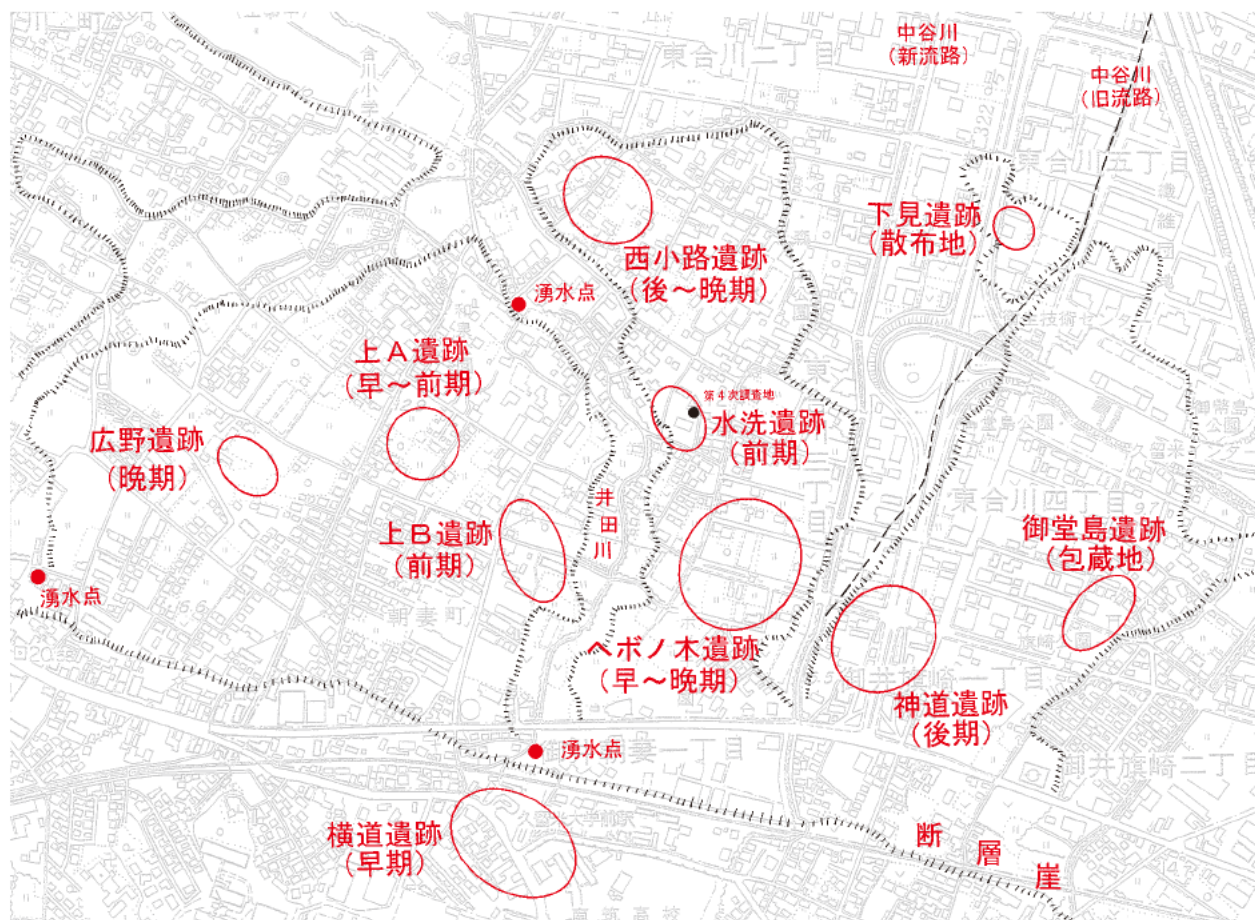
第1表 水洗遺跡第4次調査遺物一覧表①

No.	出土遺構	種 別	器 形	法 量（cm）			装 飾		調 整			胎 土 ・ 石 材	備 考	登録番号
				口 径 [長]	底 径 [幅]	器 高 [厚]	色 調		文 様	外 面	内 面			
							外面・外周	内 面						
1	SD5	土師質	鍋	-	-	(3.8)	橙	橙	玉縁口縁	ナデ	ナデ	少量の雲母・石英		200537 -000002
2	SD5	石製品	鍋	[19.7]	-	(4.4)	灰	灰	羽釜状	ケズリ	ケズリ	滑石		200537 -000003
3	SD6	土師質	鍋	-	-	(4.4)	浅黄橙	浅黄橙	把手付き	ナデ	刷毛目	少量の雲母・石英		200537 -000004
4	SP3	土師器	椀	14.7	8.4	7.3	橙	橙		ナデ	ナデ	多量の赤色粒子		200537 -000001
5	SK8	縄文土器	深鉢	-	-	(3.8)	黒褐	黒褐	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第Ⅰ類	200537 -000011
6	B-5グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(3.0)	黒褐	にぶい黄橙	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第Ⅰ類	200537 -000032
7	C-4グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.2)	灰黄褐・黒	黒褐	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・角閃石	第Ⅰ類	200537 -000064
8	SK8	縄文土器	深鉢	-	-	(3.0)	黒褐	灰黄褐	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石	第Ⅰ類	200537 -000009
9	SK8	縄文土器	深鉢	-	-	(3.0)	褐	にぶい黄橙	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石 雲母・角閃石	第Ⅰ類	200537 -000010
10	A-3グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(2.9)	灰褐色	灰褐色	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第Ⅰ類	200537 -000021
11	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(3.6)	暗褐色	暗褐色	隆帯文	ナデ	ナデ	微砂粒	第Ⅰ類	200537 -000048
12	SP11	縄文土器	深鉢	-	-	(9.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第Ⅰ類 口縁部に刻み	200537 -000015
13	D-2グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(3.0)	黒褐	にぶい黄橙	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石	第Ⅰ類	200537 -000080
14	C-7グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石	第Ⅰ類	200537 -000067
15	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.1)	黒褐	黒褐	隆帯文	ナデ	貝殻条痕	多量の石英・長石	第Ⅰ類	200537 -000040
16	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(8.3)	浅黄橙	灰白・黒	隆帯文	ナデ 条痕文	ナデ	多量の石英	第Ⅰ類	200537 -000046
17	D-2グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.0)	黒	黒	隆帯文	ナデ 条痕	ナデ	多量の長石・石英	第Ⅰ類	200537 -000084
18	C-4グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.9)	褐灰	灰黄褐色	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英	第Ⅰ類	200537 -000062
19	B-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.0)	黒 にぶい黄橙	にぶい黄橙	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石	第Ⅰ類	200537 -000026
20	B-4グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(2.4)	黒褐	黄灰	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・角閃石	第Ⅰ類	200537 -000029
21	検出面	縄文土器	深鉢	-	-	(7.2)	にぶい褐	黒褐	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第Ⅰ類	200537 -000093
22	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(7.1)	橙	黒	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第Ⅰ類	200537 -000057
23	D-4グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.0)	橙	明黄褐	隆帯文	ナデ	ナデ	多量の石英・雲母・角閃石	第Ⅰ類	200537 -000088
24	SK8	縄文土器	深鉢	-	-	(8.6)	黒褐	黒褐	隆帯文	ナデ 条痕文	条痕文	多量の石英・長石 雲母・角閃石	第Ⅰ類	200537 -000008
25	D-4グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(10.6)	黒褐	黒褐	隆帯文	ナデ 条痕文	条痕文	多量の石英・長石・雲母	第Ⅰ類	200537 -000089
26	SK8	縄文土器	深鉢	-	-	(3.2)	黒褐	褐灰	隆帯文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石・角閃石	第ⅡA類	200537 -000012
27	B-4グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(8.6)	黒	黒	隆帯文 押し文	ナデ 条痕文	条痕文	多量の石英・長石 雲母・角閃石	第ⅡA類	200537 -000030
28	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(6.3)	にぶい橙	褐灰	隆帯文 押し文	ナデ	ナデ	多量の石英・雲母	第ⅡE類	200537 -000055
29	A-1グリッド	縄文土器	鉢	-	-	(5.6)	黒	黒	隆帯文・刺突 文・綾杉文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石	第ⅡA類	200537 -000020
30	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.5)	黄灰	黄灰	隆帯文 刺突文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第ⅡC類	200537 -000037
31	D-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.2)	黒褐	にぶい黄橙	隆帯文 綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石 雲母・角閃石	第ⅡC類・ 口縁に刻み	200537 -000076
32	D-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(2.7)	黒	黒	隆帯文・押し 文・綾杉文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石・雲母	第ⅡE類・ 口縁に刻み	200537 -000073

〔 〕は復元値、() は残存値を示す。

第2表 水洗遺跡第4次調査遺物一覧表②

No.	出土遺構	種 別	器 形	法 量 (c m)			装 飾		調 整			胎 土 ・ 石 材	備 考	登録番号
				口 径 [長]	底 径 [幅]	器 高 [厚]	色	調	文 様	外 面	内 面			
33	D-2グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(3.7)	灰黄褐	灰黄褐	隆帯文 綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石	第ⅡD類・ 口縁に刻み	200537 -000081
34	A-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.8)	灰黄褐	黒褐	隆帯文 綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石	第ⅡD類	200537 -000018
35	D-2グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.5)	黒褐	灰黄褐	隆帯文 綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石 角閃石・赤色粒子	第ⅡD類	200537 -000082
36	A-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(3.8)	黒褐	黄灰	隆帯文 綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石・雲母	第ⅡD類・ 口縁に刻み	200537 -000019
37	D-2グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.0)	黒	にぶい黄橙	刺突文 綾杉文	ナデ 条痕	条痕文	多量の石英・長石	第ⅡE類	200537 -000083
38	検出面	縄文土器	深鉢	-	-	(3.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刺突文 綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石	第ⅡE類	200537 -000094
39	D-4グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刺突文 綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石・角閃石	第ⅡE類	200537 -000087
40	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.0)	橙	褐灰	押引文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石	第Ⅲ類	200537 -000042
41	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(1.9)	橙	橙	平行沈線文	ナデ	ナデ	少量の雲母 多量の滑石粉	第Ⅳ類	200537 -000051
42	C-2グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.2)	にぶい橙	橙	平行・狐状 沈線文	ナデ	ナデ		第Ⅴ類	200537 -000058
43	D-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(3.5)	黒褐	にぶい黄橙	平行沈線文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石 雲母・角閃石 多量の石英・長石	第Ⅳ類	200537 -000075
44	A-7グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(6.5)	黒褐	にぶい黄橙	平行沈線文	ナデ	ナデ	多量の石英・長石	第Ⅳ類もしく は第Ⅴ類	200537 -000025
45	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(6.3)	黒褐	にぶい黄橙	平行・狐状 沈線文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石・角閃石	第Ⅴ類	200537 -000049
46	A-7グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.9)	黒褐	にぶい橙	平行・狐状 沈線文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石・雲母	第Ⅴ類	200537 -000022
47	B-5グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.7)	灰黄褐	灰黄褐	平行・狐状 沈線文	ナデ	条痕文		第Ⅴ類	200537 -000033
48	A-7グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(3.3)	黒	にぶい褐	綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・角閃石 赤色粒子・長石	第Ⅵ類?	200537 -000024
49	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(7.0)	黒褐	灰褐色	綾杉文	ナデ	条痕文		第Ⅵ類	200537 -000038
50	S P 11	縄文土器	深鉢	-	-	(5.4)	黒褐	黒褐	綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石 赤色粒子 多量の石英・長石	第Ⅵ類、 穿孔有り	200537 -000017
51	D-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(11.1)	黒	黒褐	綾杉文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石・雲母	第Ⅵ類	200537 -000074
52	A-7グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(4.0)	黒	褐灰色	平行沈線文 綾杉文	ナデ	条痕文後 ナデ	多量の石英・長石	第Ⅶ類	200537 -000023
53	C-1グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(6.3)	黒褐	にぶい黄橙	押引文・短 斜線文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石	第Ⅶ類	200537 -000052
54	D-6グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(5.7)	黒	褐灰	押引文・短 斜線文	ナデ	条痕文	多量の石英・長石・雲母	第Ⅶ類	200537 -000071
55	D-10グリッド	縄文土器	深鉢	-	-	(6.6)	黒褐	にぶい黄橙	綾杉文 押引文	ナデ	条痕文	サヌカイト	第Ⅶ類	200537 -000092
56	D-1グリッド	縄文石器	翼状剥片	9.9	4.6	1.3	-	-	-	-	-	サヌカイト		200537 -000072
57	C-1グリッド	縄文石器	石匙	(6.0)	4.2	0.8	-	-	-	-	-	凝灰岩		200537 -000050
58	C-9グリッド	縄文石器	すり石	9.5	9.0	5.2	-	-	-	-	-	黒曜石		200537 -000069
59	C-1グリッド	縄文石器	石鏃	1.9	1.2	0.2	-	-	-	-	-	黒曜石		200537 -000043
60	D-1グリッド	縄文石器	石鏃	2.2	1.6	0.4	-	-	-	-	-	黒曜石		200537 -000077
61	S K 8	縄文石器	石鏃	1.9	1.3	0.6	-	-	-	-	-	黒曜石		200537 -000005
62	S K 8	縄文石器	石鏃	(1.5)	1.3	0.3	-	-	-	-	-	黒曜石		200537 -000006
63	S P 11	縄文石器	石鏃	2.1	1.2	0.3	-	-	-	-	-			200537 -000014



第20図 調査地周辺の縄文遺跡分布図 (1/10,000)

IV. まとめ

上層検出遺構の時期については、道路遺構SF13が出土遺物は少ないものの、9世紀後半～10世紀には後出するSD1などが掘り込まれ、奈良時代から平安時代初期の遺構と考えられる。その他の遺構は、SD1・10、SK2・8が平安時代の中～後期、SD4・5・6、SK9は中世の遺構と判断される。

また、今回の調査では、昭和60年に同一敷地内の南側を調査した第1次調査と同様に、前期前半の轟B式段階、及び轟B式から曾畑式最古段階の間に位置する深堀式・野口式といったいわゆる中間土器などと呼称される時期の縄文時代遺物群が出土した。但し、第1次調査では約7,000点の縄文遺物が出土したことに対し、今回もほぼ同じ面積の調査を行いながらも、その出土量は約800点に過ぎない。これは遺物包含層が西端部にのみ存在する状況であったためと考えられる。なお、東隣接地を調査した第3次調査では後期の無文土器が少量出土したが、今回の調査では後期と考えられる土器は出土していない。

本遺跡の近辺で当該期の遺跡は、第20図に見られるとおり、東に隣接するへボノ木遺跡と対岸の台地東縁部に所在する上B遺跡とがあり、低湿地を挟んだ一帯に遺跡が展開している。旧市内域を見ても本遺跡近辺以外の該期の遺跡は、東方約1.4kmで調査され本遺跡よりも若干新しい時期を中心とした野口遺跡、南方2.5kmの散布地である国分町宮ノ脇遺跡・政所A遺跡が知られている程度である。水洗遺跡の付近は国分町の日渡遺跡群と並び、市内でも縄文時代の遺跡が集中分布する地区であるが、筑後国府跡やその関連遺跡が展開するこの地区ではその下層にある縄文時代を対象とした調査は殆ど実施されておらず、今後の調査の進展が期待される。

参考文献

水ノ江和同 「曾畑式土器の出現 - 東アジアにおける先史時代の交流 - 」 『古代学研究』第117号 1987

報 告 書 抄 録

ふりがな	みずあらいいせき だい4じちょうさ							
書 名	水洗遺跡 第4次調査							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第240集							
編 著 者 名	水原 道範							
編 集 機 関	久留米市 文化観光部 文化財保護課							
所 在 地	〒830－8520 福岡県久留米市城南町15－3 Tel. 0942－30－9225 Fax. 0942－30－9718 E－mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2006（平成18）年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査 面積	調査原因
みずあらいいせき 水洗遺跡 第4次調査	くるめし 久留米市 ひがしあいかわまち 東合川町 あざみずあらい 字水洗	40203		33° 18' 56"	130° 32' 56"	2006. 3. 14 ～ 2006. 4. 24	218m ²	共同住宅建設
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水洗遺跡 第4次調査	集落跡 散布地	縄 文 奈良～平安 中 世 近 世	ピット 2基 包含層 溝 2条 土坑 2基 道路遺構 1条 溝 2基 土坑 1基 土坑 1基		縄文土器・石器 土師器・須恵器 土鍋・石鍋 国産磁器		第1次調査区の北隣を調査。中世の溝、奈良～平安時代の道路遺構や溝、土坑が検出された他、縄文時代前期の遺物が出土した。	
土木工事の届出		平成18年1月17日			遺物の発見届け日		平成18年4月25日	
調査成果の要約								
昭和60年に第1次調査を実施した対象地の北側を調査。中世の溝や奈良～平安期の土坑、台地北西部にある西小路遺跡方面へ向かうと考えられる道路などを検出した。第1次調査の際に約7,000点の遺物が出土した縄文時代前期の遺物は、包含層が見られる調査区西部に集中して出土したが出土点数は約800点と少なく、遺構も小規模なピット2基が検出されたのみであった。								

水 洗 遺 跡

第4次調査

久留米市文化財調査報告書 第240集

平成18年11月30日

発 行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

編 集 久留米市文化観光部 文化財保護課

印 刷 谷 印刷株式会社